

一寸のペンの中の虫

「朝日新聞」を遠く離れて

第4回

ノンフィクション作家
三山 喬

「偏向報道」は右派にも左派にもある

「報道の質」を判断するうえで、最も重要なことは、十分な取材結果（ファクト）からそれに見合った結論を導いているか、という一点だと私は考える。ごく当たり前のようでいて、実は簡単な話ではない。

とくに新人記者時代は、ものの見方や文章力が不十分なために、何を言いたいのか文意のつかみづらい、

落ち度があり、Bは純粋な被害者、というトラブルがあったでしょう。このように白黒はつきりとした話は、原稿も簡単だし、スッキリと見出しが立つ。だが、たとえばAにも同情すべき事情があり、Bにも非難されるべき要素がある。そんな話だと、記事の書き方も難しくなってくる。

「Aがけしからん」「Bが可哀想」というような一刀両断の見出しは、こうなると不適切だし、かと言って「どっちもどっち」などという原稿では、そもそもなぜ、ニュースとして取り上げる価値があるのか、わからなくなってしまう。

限りなく黒に近いグレーから、極めて薄いグレーまで、その微妙なニュアンスをしっかりと見極めて表現したうえで、見出しとなるような記事の根幹をピンポ

●みやま・たかし 一九六一年神奈川県生まれ。東大経済学部卒業。九八年まで十三年間、朝日新聞記者を務めたが、ドミニカ移民問題を取材したのを機に移民や日系人に興味を持ち、退職してペルーに移住。南米在住のフリージャーナリストとして活躍した。二〇〇七年に帰国後はテーマを広げて取材執筆活動が続いている。著書に『日本から一番遠いニッポン』『ホームレス歌人のいた冬』『夢を喰らう』『キネマの怪人・古海卓二』『さまよえる町』など。

あやふやな原稿を書いてしまうことが多い。

「こんな原稿では、見出しが付けられない」

上司から厳しく叱責され、原稿は全面的にリライトされることになる。

だが、デスクがバサバサと原稿を切り刻み、論旨が整理されてゆく中で、記者自身が取材現場で見聞きした印象は、少しずつ、微妙にニュアンスがずれていってしまう。同業者なら誰もが経験したことだろう。

わかりやすい例で言えば、Aという人物に全面的に

イントで導き出す。そういった記事が書けるようになるれば、事象の判断力や文章能力を兼ね備えた一人前の記者と言つていい。

ただ、このような「適正な事実関係の認識と表現」というテーマで問われるのは、記者の技術力だけではない。そもそも記者という人種には、インパクトのある記事を書きたい、という根源的欲求があるものだし、記者個人の思想信条や正邪へのこだわりも、往々にしてデータの取捨選択に影響する。

そう、センセーショナルリズムへの誘惑と特定の価値観・イデオロギーへの執着心。この二点こそキャリアにかかわらず、記者の目を曇らせてしまう阻害要因なのである。

とくに後者に関しては、私が駆け出しの記者だった一九八〇年代の半ば、率直に言つて、所属する朝日新聞をはじめ、左派・リベラル系のメディアに問題が目立っていた。東西冷戦が続いていた時代背景も、影響したのだろう。

そういった思い込みの強い「勸善懲惡」風の記事が出るたびに、その当時、皮肉っぽく揶揄したり、正面から誤りを指摘したりして、批判していたのが、『諸